11月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　11月5日

今日市に行って見ると、12月3日の”群馬県優良素材展示会”の展示会場が出来上がっていた。
審査会も例年よりも10日ほど前倒しで11月11日だそうだ。
いつもはこの時期は、会場に使う　1号土場の掃除から初めて、出品されてきた丸太を椪べ始める
時期にあたる。　実は展示会の審査対象になる材の椪べ方には、いささかのノウハウがある。
先ずは出品された丸太の中から再度良い物を選び出し、出品既定の 3.0㎥に達する範囲で
瑕疵のある物を除外する。　つまり厳選に厳選を重ねた特別の 3.0㎥に仕上げる訳である。
その上で市場の判断の範囲で特に優秀な物は、別の場所に仮置きして、順位が低いと思われる
物から積み始める。　大体1つの土場に3点ほど椪べ手前に近くなるほど入賞の可能性が高い物を
持ってくる。そして最前列の真ん中に最優秀賞に近い物を集める、という配慮をして審査会を迎える。
従って審査会の前日まで　「あの1本をこちらの1本と差し替えよう」　などとやっていたものだった。
その時差し替えられた丸太たちは展示会場と背中合わせの土場に椪べられることが多い。
その辺りの事情を良く知っている買い方さん達は、これを狙う向きもある。
ただ今日の展示会場は、審査会まで1週間あると言うのにシンと静まり返って納まってしまっていた。
「このまま審査会をやるのか？」　と聞けば「そうなるでしょうね、もう出てこないもの」　と言う返事だ。
厳選してある手前の椪を見て回ると、市場の方でも”品評会”の体裁を作るのに苦心している事が
判るような内容だ。　来ていた買い方に聞いてみると。
「いやー、見て来てみない。世にもめずらいでかい節の大木が並んでいるよ」　などとと揶揄されている。
　さて市の方はと言えば、出荷量が非常に少ない。　出荷されるはずの利根沼田森林管理署
の材も、手続きの遅れで生産開始が遅れているという。
森林組合も出荷が少ないようだ。　前回市を見ると 244㎥ 極端に少ない。
これでは判断サンンプルが少なくて、良く判らないが、今回は 540㎥と増えている。
内容は前回の不落札を含めて　ヒノキは少々停滞に見える。
これにひきかえ　スギ は　4.0mの中目材が跳ねている。なんと 14,000円/㎥　超えである。
この傾向は、他の市場でも同様の傾向が見られると言う。
また　スギの3.0m　も強含みだ。　価格は4.0m中目程の派手な跳ね上がりは見られないが、
13,000円/㎥台が確実になっている。　応札枚数が多く、2番札も13,000円/㎥台で競って来ているからだ。
秋の需要期が確実に来ているという事に加え、品薄なのが原因と考えられる。
例年のことながら、**この好機に出荷が少ないのがなんとももどかしい。**
今の時期に他に先んじて、どれだけ早く出荷できるかが、この波にうまく乗れるか！　という事だろう。
今の価格なら、安定したシステム販売の中から一部を市場に振り分けられれば、こちらの方が
利益が見込めると思われる。　安定とバブルの使い分けが肝心だ。
明細書を見るとヒノキの売れ残りが激しいが、ほとんどが前回の不落札材で低質材である。
極端にヒノキを避ける必要は無いが、今はヒノキにかまっている場合ではない。
この時期を逃すと、年内の早い時期にまた停滞期を迎える筈だ。
これまでの経験から、このまま年を越す事は無い

調査日　素材生産協同組合　11月7日

こちらの市も出荷量は少ない。 国有林材が10件　広葉樹が18件　一般の針葉樹が29件と
国有林は市場に出すのは「市場に出すのが有利に販売ができる」と見込まれたもので
あらかじめ山土場で仕分けをした上で、椪毎に物件番号を決めて出荷しているから無駄が無い。
今回は見事に秋の需要期を捉えて、高値で売り切っている。
スギの4.0m　の中目材が、こちらでも 14,000円/㎥ を超える中で 3.0m も価格を伸ばしている。
細かく見れば、3.0m 中目材は隣接する県産材加工協同組合が落札しており、これは運賃が
必要ない分だけ上乗せ出来ているいる価格だろうが、ほぼ 14,000円/㎥ に迫る価格は
買い気の強さを物語っている。
中目材の他の寸面、つまり 16～18㎝　及び　28～36㎝　の辺りも　12,000円/㎥　を超えて
来ている事からも、県産材加工協同組合が地の利を活かした特別な例では無い事が判る。
今の需要期が来る前、までは10,000円/㎥ かそれ以下でしか売れなかった太さである。
　これに対して、一般材の針葉樹も件数こそ少ないものの、この需要期にうまくリンクした材が出ている。
こちらは山土場で仕分けをして出てくる訳では無いので、内容は様々になるが、やはり規格が需要と
合った物は、国有林同様良く売れている。
細かく見てゆくと明細書の121号から125号までの空欄が目に付く、
この辺りは4.0mの大丸太と呼ばれる範疇であり、大方の木材が量で取引される時代に有っても
一本づつ品質を問われる分野である。 外見から中身を見抜くにはそれなりの経験が必要だ。
121号のカラマツは材としては良い物であった。しかし現在のカラマツの需要は、合板用が主流である。
4.0mで出品されているが、合板用には2.0mに伐って使う。 しかし2.0mに伐ったとしても、この太さでは
ピーリングマシンと呼ばれる、丸太を桂剥きにする機械には入らない。 その結果無入札であった。
スギの大丸太は、樹皮から浅い所から節が出れば、すべて死節でしかも大きい事が必定だ。
太さに見合った使い道は無い。さりとて柱にも梁にもならない。 ただ事によるとこういった節は丸太の
片側に偏る傾向がある為、裏側の半分が使える場合がある。 この場合は使える材積を40～30％で
計算するから単価は安くなる。 全面に節が見えれば、これもまた無入札になる。
こうした大丸太から採れる製材品は、仮に「これなら良い物が採れる。」と見て買った丸太でも、やはり
偶然の産物なので、他の製材品とは別にして温存するそうだ。 かつては丸太の目利きができる
職工長さんが居て、そう言った製品の仕分けは抜け目なく行っていたものであった。
先日聞いた話だが、めったに採れない製品を、社長が別に分けて置いたら、社員に「邪魔になる。」
と言われたそうだ。 しかし、時にはこう言った”役物”と言われる材料の注文もあるそうで、そんな時には
蓄えていた役物から選び出して、顧客の要望に応えるのだ。 蓄えがなければ、あちこちで探して
とんでもなく高い製品を1本だけとか1束だけでも、また遠くからでも取り寄せなければならない。
難しい材料でも、当たり前の様に出荷できるよう備えるのが、材木屋の矜持であろう。